南吉を活かしたまちづくり調査特別委員会報告書

議長のお許しをいただきましたので、当南吉を活かしたまちづくり調査特別委員会が調査研究してまいりました内容についてご報告申し上げます。

新美南吉は、2013 年に生誕 100 年を迎えました。半田市は、この機会に数々の記念行事を開催し、全国から多くの方にお越し頂きました。新美南吉が児童文学者として、生誕 100 年、没後 70 年が過ぎた今も、高く評価され愛され続けていることを感じ取る事が出来ました。南吉が執筆活動を行なったのは、わずか 10 年余りです。生前から、高い評価を受けていたわけではありませんでした。今日の様に評価されるようになったのは、没後の顕彰活動に携わって頂いた方々のおかげです。そしてまた、30 年前から始まった彼岸花の保全活動も、多くの方に継承されてまいりました。彼岸花は 300 万本にまで増え、矢勝川の堤に南吉童話の世界を描けるまでになりました。秋のシーズンになれば、ここにも市の内外から多くの方にお越し頂いています。この彼岸花の保全活動も含め、皆様のご尽力によって半田市に残された財産を大切に活かし、引継がなければなりません。

本委員会は、この“新美南吉が遺した”大切な財産を街づくりに活かすことが、これを受け継いだ私たちの責務であると考え、調査テーマを“南吉を活かした街づくり”と定め、“まちづくりはひとづくりから”の視点に立ち、南吉文学の本質的な良さを、子どもから大人まで全ての世代に伝え、豊かな心と行動力を持った市民を育てることを目的に、鋭意調査研究してまいりましたので、その経緯と結果をご報告申し上げます。

最初に、現状把握のため、記念館の来館実績と童話賞の応募状況を確認しました。記念館では、南吉作品をジオラマで楽しめる常設展や、南吉にちなんだテーマで研究した内容などの企画展を催し、来館者を楽しませて頂いています。来館者は、8 年前の生誕記念の頃と比較すれば減少はしていますが、2017 年度は 60,931 人、2018 年度は 53,295 人、コロナの影響が出始めた 2019 年度も 54,637 人の方にお越し頂いています。このように多くの方にご来館頂いていますが、来館されている方の 80%以上が知多半島外で、市内からの来訪は 10%程度と云うことが課題だと考えます。

また、新美南吉童話賞は、2020 年度で 32 回を迎えています。近年はオマージュ部門を設けるなど、独自色と応募し易さに工夫をしており、2,000 編近くの応募があります。多くの応募はありますが、2019 年度の市内からの応募は 252 編、市内小中学生の応募は 231 編であることから、市民からの応募数が少ない点に課題が感じられます。

次に、子どもたちの教育や市民の日常の暮らしの中に南吉作品と出会い、親しむ機会があることも、顕彰活動において大切であると考え、南吉作品を活用した取組みなどについて確認しました。

1994 年に開設された新美南吉記念館については、開設以来多くの方のご来館があり、2010 年には、当時の天皇皇后両陛下に行幸啓（ぎょうこうけい）を賜りました。しかし、市内の子どもたちが、必ず記念館を訪れる機会を設けてはいません。市内の子どもたちが記念館を訪れる事ができるのは、在籍する学校が校外学習の対象に選んだ場合と、家族と共に来館する機会に限られています。南吉についての学習は、記念館学芸員による出前授業でおこなっているとのことでした。

次に、学校教育に目を向けてみます。南吉の「ごんぎつね」は、1956 年に小学校 4 年の国語教科書に初めて採用されました。1980 年からは、全検定教科書に採用され、現在まで 4 年生の国語教科書全てに掲載されており、これまでの累計で日本の人口の半数以上の 7 千万人に読まれ、愛されています。半田市の子ども達は、小学校 4 年生の国語の授業で南吉に出会う事が出来ますが、必ず出会えるのはこの機会のみです。

この他に、朝読など読書の機会や、新美南吉の作品の中でも低学年と高学年向きのそれぞれの学年に応じた作品が選定されている集団読書テキストで学習する機会があります。いずれも様々な学習内容の増加で、時間確保が困難との声をお聴きしています。また、半田市立図書館の主催で、新美南吉の作品を読みこんだ後、印象に残った場面を絵にする「新美南吉読書感想画コンクール」があり、小学生を中心に毎年 1,000 点以上の応募があるものの、応募は任意とのことです。従って、必ず“南吉作品に親しみ、南吉に出会える機会”とはなっていません。このように全国的には高い評価を得ている反面、“南吉”が市民に充分浸透していない点に課題があると考えます。

一方の“新美南吉が遺した”もう一つの財産であります矢勝川の彼岸花の保全活動は、小中学生や市民活動団体活動など多くの方に支えられて来ましたが、活動の中心を担う方の世代交代が円滑に進んでおらず、地域コミュニティのモデルとも云える活動の継続が危ぶまれる状況となっています。この活動が途切れてしまうことになれば、半田市にとっては大きな財産を失うことになり、ここにも、大きな課題があります。

このような本市の状況を踏まえ当委員会は、講師を招いての勉強会、安城市への視察、またコロナ禍のため現地視察がかなわなかった中津川市、上越市、台東区へは文書照会による調査を行いました。

始めに、新美南吉記念館元館長の山本英夫氏を講師に招き勉強会を開きました。ここでは、南吉作品の魅力は、「物語性の豊かさ」・「描写力・表現力の確かさ」・「郷土性の豊かさ」にあり、童話作品については、子どもから大人までが世代を越えて親しめることを確認しました。また、半田独自の「集団読書テキスト」は、山本英夫元新美南吉記念館長始め現職の先生たちが創作しており、これを南吉の学習教材として活用すれば、子どもたちが南吉に親しむきっかけに繋がることが期待できます。併せて、教員も南吉を学習する機会になると思います。

次に、南吉が女学校教師として過ごした安城市を訪問し、同市の南吉顕彰を視察しました。安城市では、市民生活部アンフォーレ課が南吉関連事業を所管していました。主な事業としては、まちなかアートに取組んでおられ、作品点数は30点以上あり、市街地のいたるところで目にすることができました。ちなみに半田市も南吉関連の記念碑などを19カ所に設置していますが、殆どが公園か学校内の設置で、街角などの市民が日常生活で目にできる場所への設置は市役所前広場などわずかです。

もう一つの特徴的な事業として、南吉作品を絵本にする「新美南吉絵本大賞」を設けていました。大賞受賞作品をハードカバーの絵本にして、ブックスタート事業として毎年1,000部以上を“こんにちは赤ちゃん事業”の折にプレゼントしていました。子育て世代の転入が多いこともあり、南吉童話との最初の出会いとしているとのことでした。

また、安城市は南吉記念館の様な顕彰施設がないので、図書館司書により小中学校へ新美南吉を題材にした出前授業を実施しているとのことでした。

次に、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により視察訪問はかないませんでしたが、文学者の顕彰活動を行なっている自治体へ、文書照会を行い、調査いたしました。

調査に応えて頂いた自治体は、藤村記念館のある岐阜県中津川市、小川未明文学館のある新潟県上越市、池波正太郎記念文庫のある東京都台東区です。

藤村記念館は、明治から昭和にかけて活躍し、「夜明け前」「破戒」などの作品をのこした中津川市出身の文学者、島崎藤村を顕彰する施設で、中山道馬籠宿の一画にあります。記念館は、財団法人藤村記念郷が設立し運営をしており、中津川市を介して運営の状況や、中津川市のかかわりなどをお聞かせいただきました。

藤村記念館の入場者数は、年間2万5千人程度。学芸員は不在で、作品研究は行っていないとのことでした。3年ほど前まで文学講座を続けてきましたが、講師が高齢になり現在はおこなっていないとのことです。新聞テレビ雑誌等のマスコミからのたくさんの取材や、全国の文学館への資料の貸し出しには、全面的に協力しているとのことでした。

中津川市では、外郭団体の島崎藤村記念文芸祭実行委員会が主催する、島崎藤村文芸祭を行っています。文芸祭は、小中学校の部を合わせ、2,000編に及ぶ応募があり、各部門の優秀作品を掲載した作品集を残しています。

島崎藤村記念文芸祭実行委員会は、小中学生向けの文芸出前講座も行っており、2019 年度は小中学校併せて6校から402名の生徒の参加があったとのことでした。

小川未明文学館は、上越市出身で明治から昭和にかけて活躍し、「日本のアンデルセン」「日本児童文学の父」と呼ばれた小川未明を顕彰する施設です。小川未明の業績と作品はもとより、生い立ち、作品が生まれた時代背景、人間性などをわかりやすく紹介するとともに、小川未明を中心に近代文学の資料を収集し、その研究・公開を行っています。

小川未明文学館は、上越市立高田図書館内にあり、企画制作部文化振興課が所管しています。文学館へは毎年 2～3 万人の来館があり、半数ほどは 60 歳以上ですが、多くが市内在住の方で繰返し来館しているとのことでした。

小川未明文学賞は、未来に生きる子どもたちにふさわしい児童文学作品の誕生を願って、1991 年に創設された公募による文学賞で、2021 年で 29 回を迎え、毎回 500 編前後の応募があり、大賞受賞作品を民間により書籍化し発売しています。プロを目指すセミプロの作家たちの登竜門とも位置付けられ、今年度の大賞は、愛知県在住の方が受賞されました。

この童話賞の外に、“文学館講座”の開催、市内小中学校図書館教育担当者と学校司書を対象にした「 図書館教育担当者研修会 」、小学校及び放課後児童クラブに出向いて未明作品を朗読する「出張おはなし会」の取組みや、「小川未明文学館 館報」を刊行するなど、幅広い年齢層の市民が小川未明の作品に触れる機会を作っているとのことでした。

池波正太郎記念文庫は、江戸下町を舞台にした「鬼平犯科帳」「剣客商売」「仕掛人・藤枝梅安」などの時代小説を残した、上野浅草出身の池波正太郎を顕彰する施設として、2001 年に開設されています。自筆原稿・絵画等を常設展示するほか、作品の世界を広く伝えるための企画展を継続して開催しています。都心で魅力的な展示をしているこの顕彰施設の年間来館者は、2017 年度 46,128 人、2018 年度 45,543 人、2019 年度 39,324 人とのことです。

このような研修や視察及び文書による調査を経て、以下の意見がありました。

記念館の顕彰事業について

・新美南吉記念館の年間来館者は 5 万人以上である。これは他の顕彰施設を上回る実績で、これまでの顕彰活動の賜物と云える。その反面、市内からの来館が 1 割に満たない点は改善が必要である。

学校教育について

・南吉顕彰を目的として記念館を設けているので、その趣旨に基づいて小中学校の子ども達が記念館を訪れる機会を作って欲しい。
・集団読書テキストは、南吉童話に親しむ優れた教材である。積極的な活用がみられるのは一部の学校に限られており、子ども読書活動推進計画に明記するなどして、大いに役立てて欲しい。
・読書感想画コンクールも楽しく学べる機会である。このような機会を通して、新美南吉に親しんで頂きたい。
・先生たちが新美南吉について親しみ理解する機会を整えることが必要

未就学児を対象とした取組みとして

・幼児期から本に親しむ習慣を身に付けることは大切で、絵本の読み聞かせの時期から南吉童話に親しむ環境を設けて欲しい。

・安城市は、ブックスタートで「南吉の絵本」をプレゼントしている。半田市もこのような取組みをして欲しい。

彼岸花の保全活動について

・矢勝川の彼岸花保全活動は、地元で芽生えた夢のある活動である。地域の絆づくりの素にもなっており、継続することに大きな意義があると思う。
・彼岸花保全活動継続のためには、有償ボランティアまたは委託、農業高校からの協力を得るなど検討が必要。
・南吉の児童文学の顕彰に止まらず彼岸花の保全活動にまで広がった諸活動は、日本一になれる要素がある。

全庁的な取組みについて

・多くの日本人に読まれ愛され続けている童話作家南吉の故郷（ふるさと）として、市民一人ひとりに南吉への誇りと愛着を育むために、常に南吉を中心に据えた政策や事業を展開して欲しい。
・間近に迫っている生誕 110 年事業は、記念館・図書館・学校教育・幼児教育・市民協働・観光など多岐に亘って、全庁的な連携を図って欲しい。
・まちなかで南吉を感じられるものが少ないため、市内の駅前周辺や色々な所に「南吉の作品」を感じるものがあるとよい

このような意見をふまえ、以下の提言をします。

一、学校教育においては、「市内全ての小中学生の南吉記念館への訪問」・「集団読書テキストの更なる活用」・「教育担当者への南吉研修の実施」など、南吉と出会う機会を設けてください。
一、南吉童話を題材にして、ブックスタート時の絵本プレゼント、幼児期の絵本の読み聞かせ、朗読会などを実施してください。
一、街角で南吉作品に出会えるよう、ＪＲ半田駅前土地区画整理事業の折や市内ゆかりの地にモニュメント等の設置を計画してください。
一、矢勝川の彼岸花保全活動を確実に継続するために、奉仕活動に依存しない仕組みを作ってください。
一、南吉関連事業においては、あらゆる世代が南吉に親しめるように、教育部は全庁的な取組に発展するよう一層の連携を図り、計画的に実施してください。

新美南吉の顕彰活動は、記念館と地域の皆様によって日本中に誇れる成果を残してきました。先人たちが遺したこの半田市の財産を次世代につなぐためにも、“まちづくりはひとづくりから”の視点に立ち南吉を活かしたまちづくりに取組んで頂くようお願いします。
以上をもって、南吉を活かしたまちづくり調査特別委員会の報告とします。